



TITLE:

西洋理論から見た社会安定の位相 —西洋型社会の中産階級理論を 中心に(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

龍, 瀨

CITATION:

龍, 瀨. 西洋理論から見た社会安定の位相 —西洋型社会の中産階級理論を中心に. 京都大学, 2016, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-01-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19414>

RIGHT:

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	龍 瀟
論文題目	西洋理論から見た社会安定の位相 —西洋型社会の中産階級理論を中心に		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本学位申請論文は、中産階級は市場の運営および社会秩序の安定に重要な役割を果たしているという従来の理論を踏まえ、それとは異なった観点から、社会の安定は多元的で総合的なシステムの産物であることを明らかにする。そのうえで、歴史的変遷のなかで流動的で不安定な存在となっている現代の中産階級は、他の階級や社会全体と協調的で良好な相互関係を築いてはじめて社会的安定につながることを論証するものである。</p> <p>本論文は、序論と五つの章および結論から成る。序論では、先行する研究の精査を通して、中産階級の役割と性格に関しては複数の相反する見方が存在していることを指摘し、本論文が、中産階級と社会的安定の相関関係についての理論的間隙を埋める試みであることを明らかにしている。まず、生産手段の所有の有無により有産階級と無産階級への二極化を唱えたマルクス理論と、ウェーバーから発展してきた社会成層理論という二つの流れに注目する。新マルクス主義者に共通する中産階級理論として、「新中産階級」論、「矛盾的階級」論、「サービス階級」論などを検証し、ウェーバーの多元的社会成層理論の流れを汲む複数の社会学者にも言及して、中産階級の性格に関して多様で相矛盾する見解があることを指摘している。さらに、ファシズムの潜在的な温床としての中産階級論、また豊かな社会を演出する言説装置としての中流幻想論などにも触れ、中産階級の役割に楽観的な研究ばかりではなく否定的な研究も踏まえた総合的観点をとることを明示する。</p> <p>第一章は、主に紛争理論と構造機能理論の考察を通して、中産階級が社会的安定の基礎となるという「安定剤」理論の欠陥を指摘し、それが静的な考え方であることを論じている。まず、社会における変遷、紛争、支配関係の普遍性を前提とするマルクス、ジンメル、ダーレンドルフなどの紛争理論と、社会の諸要素の機能性、構成員の合意の下での統合を強調するパーソンズなどの構造機能理論が比較される。申請者は、社会とは一元的でなく、多元的で複雑なシステムであり、社会全体の安定には、政治的・経済的・イデオロギー的安定など様々なサブシステムが含まれるとする点では、両者に一致点があるとする。こうしたサブシステム間の相互作用によって生み出される安定は、静的-保守的安定と、動的-発展的安定に分類できるが、資源と利益の配分格差や価値観の多様化による衝突が起こりやすい動的-発展的な社会において、中産階級に関する「安定剤」という説は、まさに静的な見方であると指摘する。</p> <p>第二章では、西洋社会の中産階級と社会の変遷との関係を歴史的な角度から考察している。申請者は、中産階級を理想とする西洋の思想は、アリストテレスにまで遡るとしている。但し、奴隷制度を擁護するなどのアリストテレスの政治倫理・制度論には時代的・階級的限界があることも指摘する。さらに、マルクス・エンゲルスの中産階級の不安定性に関する分析、レーニンの小ブルジョワジーの経済的地位の脆弱性と政治態度の両面性の分析を踏まえ、利益、意識、社会要求、政治的地位の異なる小集団から構成される中産階級は共通の階級意識を持ち一致した行動をとることができないとする。こうした見解を裏付けるものとして申請者は、ヨーロッパのブルジョア革命において中産階級は、現状維持を求める保守的態度と革命や改革に活発に参加する進歩的態度の両面性を見せたこと、アメリカの社会運動でも、利益や価値観の多元化</p>			

により伝統的組織や階級関係は弱体化し、中産階級は断片化され、社会運動主体も階級・階層から「集団」や「団体」に移行していったこと、故に「進歩」と「調和」の担い手としての中産階級の「神話」はアメリカでも崩れつつあるとする。ここから、歴史的にも、中産階級と社会秩序との関係は必ずしも安定しておらず、時代背景により動的な性格をもつ変数であると結論づける。

第三章では、中産階級は矛盾した性格を持ち、社会発展の中の動的な変数であることを具体的に説明していく。第一に、中産階級の二面的で矛盾した性格を形成する諸要素として、私的利益の重視から投機性や両面性をもち動揺しやすいこと、その中間的地位ゆえに団結して行動する必要性が弱まったこと、階級間流動が多いことなどを挙げている。さらに、「経営革命」や「科学革命」が専門知識をもつ中産階級に「華麗なる転身」の機会を与えたとするポスト・工業社会論に対して、新しい技術の採択を決めるのは資本側であり、技術・科学・経営の革新は現存の資本主義生産関係を覆さなかったことを強調する。すなわち申請者は、中産階級は「階級」としての共通意識をもたず、いわゆる「管理革命」や「科学革命」も私有制の枠内で行われた調節に過ぎず、不満を抱えた中産階級は社会に安定をもたらすどころか、それ自身も不安定な要素になりかねないとする。

第四章においては、ハンチントンやアイゼンシュタットなどの先行研究における近代化論を援用し、欧米型の先進国社会の中産階級の現状を、それとは異なる道をたどる「アジア四小龍」と呼ばれた台湾、香港、シンガポール、韓国における中産階級の発展と比較しながら論じている。まず申請者は、現代の欧米型社会の中産階級が分化・萎縮する理由として、グローバル化の影響、情報技術などの新しい技術の普及、新自由主義の台頭による福祉・財政政策の変化が再分配の機能を弱体化させたこと、などを挙げる。中産階級の経済的地位の脆弱化の要因として、物価上昇、債務圧力の増大を指摘し、さらに文化、消費、生活態度で上流社会を模倣しなければ不安になる中産階級の生活スタイルも、不満を抱えつつも主体性を持たない中産階級の萎縮につながっているとする。一方、「アジア四小龍」が政府主導のもと発展を遂げた理由として、儒教の影響、領土・資源の欠乏、植民地支配の経験などを挙げている。こうした比較研究も交えた資本主義市場経済社会における中産階級の現状から、中産階級を社会の「安定剤」とする理論は、すべての文化背景、時代背景のもとに一律に適用できる法則ではなく、特に、グローバル化、情報化のなか、国家間の相互依存、政府による制度的調整、社会の利益集団間の協力や相互制約が社会的安定に欠かせない要素となっていると結論づける。

第五章では制度分析の視点から、欧米型先進資本主義国家の制度、組織および機制を論述し、国家と社会との良好な相互作用が社会的安定の鍵であることを述べる。社会秩序と制度の制約および統合の下、利益集団もしくは社会団体が政治参加者として利益を主張する機制は、社会の緊張度を制御可能な範囲内に抑え、社会を安定させるためにも必要であることを、制度分析を通して論じる。

結語部分では、先進資本主義社会の安定は中産階級とその市場能力だけではなく、民主的で合理的な制度にも密接につながっているとする。中国を含めた非西洋社会の今後を展望するうえでも、中産階級という流動的で可変的な存在を静的ではなく動的に捉え、その正負併せ持った可能性を、西洋社会、非西洋社会それぞれの歴史的・文化的特徴を踏まえつつ、最大限に活かしていく必要性に触れ、本論文が今後のより実証的な中産階級研究の土台であるという研究上の意義が提示される。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、古今東西の中産階級に関する理論—アリストテレスからマルクス、ウェバー、パーソンズの構造機能社会学、欧米のネオ・マルクス主義などを検証しながら、中間階級ないしは中間層の社会構造のなかでの役割、可能性、問題点を考える新たな理論的枠組みを構築しようとする論文である。中産階級を社会における安定剤・緩和剤だとする西洋的な理論的枠組みに対して、反論している点は著者の独自性といえる。すなわち、申請者は、中産階級が社会の安定化に貢献するという特に欧米で現れた説は、成熟した産業社会と市民社会のなかで出現した中産階級という歴史的特殊な条件においてのみ整合性をもつが、非西洋社会に必ずしも当てはまらないだけではなく、分化・衰退・萎縮の現象がおこっている現代の欧米型社会の中産階級の実体とも矛盾することを丹念に検証している。

本論文において特筆すべき点は、第一に、英語、中国語、日本語による文献を幅広く渉猟し、社会学、経済学、歴史学など学際的な視点から、中産階級は社会的安定をもたらすという静的な理論を批判するための基本的視座を提起している点である。申請者は、中産階級に関する従来の「安定剤」理論が生まれてきた背景として、中産階級の「エリート」たちに、民主、自由、進歩の精神を期待し、理想化した価値を付与してきた西洋理論のバイアスがあったと示唆する。さらに、「安定剤」理論の欠陥として、経済的、政治的、イデオロギー的に変動し流動しつつある動的な社会のなかで、常に統合と分化、拡大と衰退、発展と萎縮のプロセスを繰り返してきた中産階級を実体よりも静的に捉えすぎるきらいがあることを指摘しているのは、優れた着眼点だといえる。自己の価値やステータスへの満足感と不安、政治的反動と進歩、上流階級と労働者階級の狭間で揺れ動いてきた中産階級の矛盾と両面性、その限界と可能性を複眼的に捉え、紋切型の断定を避けた柔軟な議論を展開しようとしている点が評価できる。

第二に、本論文では、西洋の中間階級理論を非西洋に適用できないという開発経済学的にも重要な視点が提起されている。西洋資本主義国家の近代化モデルは途上国の近代化にとって必ずしも必然的でないとしたS・N・アイゼンシュタットやサミュエル・ハンチントンらの近代化理論を援用し、さらに、いわゆる「四小龍」の東アジアモデルにおいて、社会的安定を主導したのは中産階級というより権威的ともいえる政府であった例を引きながら、未だ市民社会の成熟にいたらぬ発展途上国での社会的安定をもたらすのは、政治的、イデオロギー的、制度的なサブシステムの連動・相互作用であって、中産階級はそうしたサブシステムの一つに過ぎないことを丹念に説明している。さらにグローバル化の波のなかで、社会的安定の外的条件である国際環境に多くの変数が存在しており、偶発的な要素や制御不可能な要素が増える中で、社会的安定の鍵となるのは、中産階級というよりむしろ強固で合理的な制度であるという議論は、申請者の関心が今日的な課題とも結びついた、時機を得たものであることを示している。

第三に、申請者は、アメリカの労働運動や社会運動のなかでの中産階級と労働者階級との連携あるいは離反、富の集中により「古き良き」アメリカの中産階級が弱体化、無力化しつつある現状、さらには「一億総中流」とされた日本社会でも貧富の格差が増大し、特にバブル期以降には中産階級の役割に対する否定的な言説が盛んになった

ことを具体的に示しながら、中産階級への過度の期待感と失望感は背中合わせの関係にあることを的確に指摘している。その不安定性や流動性からマルクスのいう「対自的」階級になりえない中産階級の根本的限界を踏まえたうえで、労働者階級とも協力しながら社会的安定に寄与するというバランスの取れた中産階級の自己認識を促している点で、申請者の視点は新鮮であり、新たな社会モデルの理論を構築していきたいという意欲を感じさせる。

全体として、本論文は、学際的な視野から多様な糸を紡ぎ合わせ、中産階級と他の階級・階層、社会・国家との関係とその相互影響関係に関して、これまでの理論の整理と折衷、仮説的な提言を行うものであり、今後の中産階級をめぐる社会学的、政治学的、歴史学的比較研究に有益な知見を提供する労作である。

このように価値のある論文であるが、幾つか今後の課題として残された点もある。例えば、西洋の中産階級理論を非西洋にあてはめることができないとする主張を裏付ける非西洋社会の実体経済の分析、数字的データが少ないといううらみがある。さらに、21世紀において中国の中間階層の動静に研究者の関心が集まっている中、本論文での議論が中国の今後の展望に使えるかどうかを、中国の経済構造や中間階層の在り様を実証的に研究することを通じて考察することも重要であろう。さらに、一つの階級や運動の二面性や矛盾を強調する申請者の議論は興味深い反面で、視点が拡散しすぎではないかと思われる点もあった。例えば、中産階級が資本主義の延命に資するのか、新たな社会運動の起爆剤になるのか、マルクス主義が今でも有効な理論になりうるのか、といった点に関して、より緻密な論証が求められるところである。しかし、こうした幾つかの問題点は、今後の研究の継続によって十分に解決しうるものである。本学位申請論文は、歴史社会学の分野に新しい知見と視角を提供しており、学際的な研究を目指して創設された本研究科にふさわしい内容を備えているものといえる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年11月4日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。